

狸 17 狸寄せの話      = = =      猪・鹿・狸より

以前は村の若い者が五、六人集まると、コクリ〔狐狗狸〕だの西京鼠（さいきょうねずみ）、その他狐や狸を寄せて、慰み半分に遊んだものであった。なかでも狸寄せは、最も早く亡びて、後にはめったにやるものはなかったと言う。格別方法が面倒と言うわけでもなかったから、やはり流行だったのだろう。寄せる方法の大体を言うてみると、目隠しをさせたり、白紙をしごいて幣帛の代りに持たせることなどは、他の神寄せ、狐寄せの類と変りはなく、ただ呪文が少しちがっただけである。呪文の全部を掲げてみる。

テンニトロトロ    チニトロトロ

アサヤマハヤマ    ハグロノゴンゲン

ダイミョウジン

オイサメ    メサレ    オイサメ    メサレ

ただこれだけの文句を、寄るまでは何回でも繰り返すのである。狸が寄ると言う前後の状況を言うてみると、最初被術者の顔色が、だんだん蒼白くなる。続いて呼吸が急しくなるにつれて、今度は顔色が次第に上気して、ほとんど真っ赤になる。そうなるやと体中が劇しく震えて、時々坐ったまま踊り上がるようになる。この時は、道中を急いでやって来るところだなどと言う。そこを過ぎると、ふたたび顔からだんだん血の気が薄らいで行って、最後に真っ蒼になると、体が急に落ち込んだように、小さくなってしまふ。こうなるともう狸が寄ったのであるから、そろそろ問答を始めてもよいのである。もちろんこれは村の若い衆がやった方法で、ある時旅の行者が狸を寄せた時は、呪文や方法が全然ちがっていたそうである。

寄った狸を帰す時は、背中に犬の字を書いて、最後の点を強く打てば、それでよいのであるが、この方法を怠ったり、あるいは目隠しの手拭が自然に解けたため正氣づいた時などは、後になって近所の子供や老人に憑いて困ったそうである。そのことについてある老人の話によると、ことが了ってから、自分の子供に憑くと見えて夜泣きをして仕方がなかった。抱いていればそうでもないが、床へ寝かすと体が急に硬直して、火のつくように泣き出す、それで来る晩も来る晩も、女房と交る交る抱いて夜を明かす。そうそう家の中にもいらぬので、そとに出て子供を揺り揺り歩いてしたが、ある時などつくづく狸など寄せるものでないと後悔して、子供と一緒に泣いて歩いたこともあったそうである。その間には、種々な魔除けの方法などもやって見た。短刀をそっと枕辺においてみたり神社の御符を布団の下に敷いてみたりしたが、一向効きめはなかった。そのうちふっと思い出して、山犬の上顎〔下顎〕で造った根付を出して来て、布団の下へ入れると、それなり嘘のように夜泣きがやんでしまったと言

う。以前は山犬の上顎〔下顎〕を乾し上げたもので根付を作って、魔除けとして持っているものがよくあったのである。顎の内部を紅く漆塗りなどにして、腰に下げている人を、現に自分なども見たことがあった。

狸寄せなども盛んに方々でやっていた頃は、わけもなく寄ったそうであるが、一度流行しなくなってからは、容易に寄らなんだとも言う。コクリなどもそうであった。流行していた頃は、面倒な手数を掛けないでも、酒の席で慰み半分に箸を本結えて立て、上に皿を冠せて唱えごとをすると、それでもう膳の上をよちよち動き出したそうである。あのよく寄った時分には、狸などもそこいらにどれほどでも遊んでいて、こちらが寄せをのを待っていたかも知れぬなどと、真面目になって話した老人もあった。